

# 悪口を言う者に祝福を祈り

ルカによる福音書 6 : 27 - 38



司祭 ヨハネ 井田 泉

2025年2月23日

顕現後第7主日

京都聖三一教会にて

今日の特禱で、わたしたちはこう祈りました。

「神よ、あなたは、愛がなければどのような行いも益がなく、愛は平和とすべての徳のきずなであり、愛のない人は主の前で死人に等しい、と教えてくださいました。どうか聖霊を送り、この最もすぐれた賜物をわたしたちの心に注いでください。……」

「愛がなければ」「愛は平和とすべての徳のきずな」「愛のない人は主の前で死人に等しい」と3回も「愛」を強調しています。この言葉を前にして、わたしは自分の愛のなさを感じて情けなくなります。けれどもこの祈りには後半に希望があります。

「どうか聖霊を送り、この最もすぐれた賜物をわたしたちの心に注いでください。」

愛のないわたしたちに聖霊を送ってください。この最も大切な愛という賜物を、わたしたちの心に注いでください。神さまの愛がわたしたちのうちに注がれ満ちるときに、わたしたちもまた愛の人に変わられていく。そういう招きと励ましと希望が、この祈りにはあります。この祈りを繰り返すことによって、わたしたちは愛において成長していきたいと思えます。

そこで今日の福音書です。イエスは言われます。

「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者

に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。」

ルカによる福音書 6:27-28

「敵を愛せよ」と聞いて、すぐにそうできる人は幸せです。けれどもそれは難しい、とても無理だ、というのも正直な気持ちです。

味方を愛して敵を憎むのがこの世界であり、普通のわたしたちです。けれどもイエスは、神が願われる世界を造りたい。本来神さまが創造された美しい世界を再建したい。そのために一人ひとりの心に呼びかけておられます。

イエスはここでだれに言うておられるのでしょうか。「わたしの言葉を聞いているあなたがたに」と言われています。イエスの言葉を聞こう、イエスの生き方に倣おうと願って、ここまで従ってきた人々に言われる。だれにでも通じる、だれにでもすぐ分かる教えを語られたわけではありません。わたしに従って来たあなたがた、わたしが招いたあなたがたにこそ、これを言うのだ、というイエスの思いがあります。イエスには弟子たちに対して願いがあります。期待があります。それは、一緒に神の国の実現に加わってほしい、そのために成長してほしい、という切なる願いです。

ここで遅れてイエスの弟子になった一人の人のことを思い出します。元々はイエスを信じる者たちを迫害していたのが、復活のイエ

スに出会って回心し、熱烈なキリスト教伝道者になったパウロのことです。

パウロ（元の名はサウロ）はどうだったのでしょうか。彼はイエスを信じる者を「敵」として憎みました。「悪口を言う者、自分を侮辱する者」のために祈るどころか、呪いました。

ところが復活のイエスと出会ったとき、自分はイエスの敵であったのに、イエスはその自分を愛してくださったことを知りました。自分はイエスとイエスを信じる者たちを呪っていたのに、イエスは自分のために祝福を祈ってくださった。自分は相手を滅ぼそうとしていたのに、相手であるイエスは、自分を生かそうとしてくださった。

パウロは、自分は人並み外れて熱心であり、聖書についての学識もあると自負していました。しかし自分には愛がなかった。間違った正しさをもって突き進み、罪のない人々を迫害し苦しめ、滅ぼそうとした。これまでの自分を思うと深い痛みがあります。しかしその自分を愛し赦してくださったイエスの愛が胸に迫り、イエスへの愛が湧き起こります。

今日の特祷はまるで彼パウロの祈りであるように思えてきます。

「神よ、あなたは、愛がなければどのような行いも益がなく、愛は平和とすべての徳のきずなであり、愛のない人は主の前で死人に等しい、と教えてくださいました。どうか聖霊を送り、この最

もすぐれた賜物をわたしたちの心に注いでください。……」

こうしてパウロは、自分に敵対する者を愛し、自分を非難する者のために祈る者へと変えられました。彼自身がこう呼びかけるようになります。

「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。」

ローマの信徒への手紙 12:14

ここで少しだけわたし自身のことを話すのをお許しください。今から 50 年以上も前の学生時代、わたしは自分の中で「クリスチャンとしてこうでなければならない」という圧迫に苦しみました。今日の「敵を愛しなさい」も「侮辱する者のために祈りなさい」も非常に困惑させる言葉です。世の中にあってキリスト者としてこうあるべきだという思いはあるのですが、それができない。かくあるべきだ。しかしできない。この堂々巡りの葛藤に長い間苦しみました。そしてそのものがきの果てに解放が起こったのです。

当時わたしは同志社の神学研究科に学ぶ大学院生で、寒い時期、年度末のレポートを書くために毎日苦闘していました。カール・バルトという神学者に「教会教義学」という膨大な量の本があるのですが、その一部に「和解論」というところがあります。レポートで求められたのは「バルトの和解論について論評せよ」でした。それ

で「和解論 I /1」という 1 冊を、毎日わからないわからないと思いつつ、読んでいたのです。バルトはモーツァルトが大好きで、毎朝、モーツァルトを聴いてから仕事に取りかかったというので、わたしもモーツァルトを毎朝聴いたら少しでもわかるかと思ってモーツァルトを聴いてからレポートに取りかかったりしていました。

そうして 10 日ほどたったころでしょうか。その本を読んでいるうちに急に、イエス・キリストの恵みの光が差してくるような感覚が起こってきました。温かな、清らかな光です。わたしが何かをするとか、しなければならぬとか、そういうこと以前に、イエス・キリストにおいて神がわたしたちに恵みを注いでくださった。福音のメッセージを分からせてくださるのもイエス・キリスト。この方に信頼するほど教会は、わたしたちは力を与えられる。この方を置いて別のものに頼ろうとするほど、教会は、わたしたちは力を失っていく。

目の前が開けていくような気がしました。わたしをずっと縛り付けて身動きできなくさせていた「ねばならない」からわたしは解放されたのです。イエスがわたしに愛を注いでいてくださる。イエス・キリストの福音の自由がわたしを生かす。そこから、キリスト者としての生き方が可能になる。

この礼拝堂の前の十字架を見てください。見つめているとイエス



が両手を広げてわたしたちを招いておられるのを感じます。拒むのではなく、わたしたちを招いておられるのです。イエスの手はわたしたちを招き、わたしたちを包む。何がどうであっても、「あなたがたはわたしのものだ」と言ってくださる。わたしたちを愛してくださる御手の中で、わたしたちのうちに新しい何かが始まる。

敵を憎むのとは違う、非難する者を呪うのとはまったく違う、新しいあり方です。

今日、心にとめたいことの第1は、「敵を愛せよ」とか「侮辱する者のために祈りなさい」と言われるイエスが、まずわたしたちを愛し、わたしたちのために祈り、わたしたちを生かそうとしてしていただく、ということです。神に背き時には敵対するわたしたちを、それでもご自分のものとして愛してくださる。わたしたちの弱さと危険を知りつつ、イエスはわたしたちのために祈っていただく。これが第1です。

そしてもう一つ、第2は、イエスはわたしたちをご自身のほんとうの弟子として育てくださる、教育し成長させてくださる、ということです。イエスさま自身が、聖霊が働いてくださるのですが、その働きかけの中で、わたしたちのほうからも一歩踏み出す。

例えば、わたしたちにとって嫌な人、とても困った人がいて、そんな人のことなどは祈りたくないと思う。けれども、イエスがわたしのために祈ってくださるので、その人のためにも祈ることを始める。これが神の国の小さな始まり。しかし大きな意味を持つ始まりです。

祈りましょう。

神さま、わたしたちを愛してくださった主イエスを思い、わたしたちもまた愛したくない人をも愛し、祈りたくない人のことをも祈ることができるように、聖霊をわたしたちの心に注いでください。神の国のために主とともに祈り働く者とならせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン